

芸術劇場

Tokyo
Metropolitan
Theatre

VOICE.23
ONE'S *voice*

ゲイゲキ × ノダヒデキ



ロングインタビュー

東京芸術劇場
芸術監督 野田秀樹

芸術監督就任10年目を迎えて

「さまざまな色」の先の、
「クオリティ」へ。

東京芸術劇場が現体制になって、ほぼ10年。

ますます精力的になる劇作家、演出家、役者としての活動と並行して、

芸術の顔として変化の舵取りを手がけてきた芸術監督・野田秀樹。

駆け抜けたこの10年で形になったことを踏まえ、これから形にしたいこと、

そのために必要なことを聞いた。



野田秀樹氏。写真：平岩孝享

野田秀樹が東京芸術劇場の顧問に着任したのが、ちょうど10年前の2008年4月。芸術監督になったのが翌年7月で、任期が10年目に突入。それ以前は、年間スケジュールの大半が貸し事業だった劇場を、自主事業の企画を中心にした「さまざまな色を持つ劇場」「にぎわいのある劇場」にする大きな目標掲げ、そのために「才能のある若い人に劇場を使ってもらう」「子供の演劇をつくる」「良質な海外の作品を紹介する」などのプランを立てて実行してきた。今では「ゲイゲキ」という略称が東京芸術劇場であることもすっかり浸透し、さまざまなシリーズ企画も定着しているが、生きた人間が関わり、社会を映す劇場に「これで安定」という最終形はない。人々の無意識を察知する優れた能力を劇作で示しているこの人がそこに鈍感なはずはなく、やるべきことはすでに頭の中にあった。

―― 芸術監督としての野田さんのステートメントは、就任会見以降はほとんど発信されていません。次が求められている時期かと思います。

野田 ありがたいことに、集客や話題性などがわりと軌道に乗っていることもあって、この1、2年は確かに「劇場としてこういう方向で」と意識するのを怠けていた部分がありました。ちょうど僕自身、もう1回きちんと「芸劇はこういう方向性を目指す」と明確にした方がいいと考えていたところです。

―― 具体的な目標はお決まりですか？

野田 基本ですけど、クオリティの高いものをつくるのがとても大事だと思います。しっかりしたクオリティの作品を観てもらえば、お客さんの目は肥えるし、いろんなものが底上げされていくはずなので。

―― 自然とクチコミが広がってお客さんが増えていくといったことでしょうか？

野田 それだけでなく、そういう作品に触れればつくり手の意識も変わっていくでしょう。最近強く感じているのが――これはこの劇場に限ったことでなく、昨今の演劇全体、日本の文化全体の特徴ですけど――、全体的に内向きになってきている。だから、海外の優れた作品を呼びたいし、優秀な演出家に来てもらって日本の俳優と組んでもらいたいと考えているんですよ。

―― 他を知らないで「自分たちはすごい」と思い込むのは危険ですね。芸劇では昨年、世界的演出家であるルーマニア人のシルヴィウ・ブルカレテさ

んが日本人キャストで『リチャード三世』を創作したり、ジョン・ケアードさんがやはり日本の俳優で『ハムレット』を演出されました。どちらも賛否両論ありましたが、刺激的な舞台でした。

野田 海外の作品をもっと呼びたいという気持ちは強まっています。というのも、うまく情報が届いていないと感じるんです。「そういう作品なら観に行ってみようかな」と思わせるところまで行っていない。そこが今、僕の中で小さくない不満になっています。

―― 広報がうまく機能していないということですか？

野田 と言うか、劇場全体に人と予算が足りていないんだと思います。文化は漠然としたものではありませんけど、人とお金に関しては現実的ですから、いくら良いものをつくって上演しても、観てもらうきっかけが不十分では届かない、理解されない。そこをまずテコ入れしてもらえるとありがたいですね。決して税金の無駄な使い方をしようとしているわけではないので。

海外についてはもうひとつ、呼ぶだけでなく日本の作品を紹介することも継続してやっていきたいです。

閉じていく時代に有効な、開かれたメディアを

「日本全体が内向きになっている」は多くの識者が指摘しているが、舞台関係者の間でも深刻な問題になっている。20世紀の世界の演劇に大きな影響を与え、生きる伝説とも言える演出家ピーター・ブルックの新作や、全世界で大ヒットしたイギリスの『ウォー・ホース～戦火の馬～』も日本では集客に苦勞したと聞く。不景気が進んでいることもあるが、それだけではないというのが大方の見解だ。

―― 最近、よく「創客」という言葉を耳にします。文字通り観客を創ることですが、そういった取り組みも必要だと思われませんか？

野田 そこは本当に悩みどころです。でもやはり僕は、マチネ公演をやたらと増やせば、客も増えるという安易な「創客」より、こちらがやっていることをきちんとして認知してもらおうほうが大事だと思っています。

難しいのは、少し前からメディアに大きな変化が起きて、つまり情報を手にするのがインターネット中心になったこと。たとえば僕の芝居が育った1980年代は、雑誌の『ぴあ』が「情報を読み物にして売る」というシステムをつくり出して、『ぴあ』をベラベラめくっていれば、演劇、映画、美術など、おもしろい文化に出合え、そこから興味が広がっていった。海外で言うと『Time Out』（演劇をはじめとするイベントを網羅した情報誌）などもそうでした。

ところがネットが登場したことで「これを読めば、これを見れば、おもしろいものがある」という抛り所が無くなってしまった。ツイッターがその役割を担っている部分もあるんですけど、僕のようにやっていない人間からすると、やっぱり情報は入ってこないし、届ける相手も限られます。

―― 今は情報の過渡期だと思います。ネットにはルールが、ネット以外のメディアには新鮮な魅力が求められています。

野田 ネットであれ他であれ、新しい媒体が必要ですね。クリティクスも含めて「あそこが推薦しているものはどうやらおもしろいらしい、お金を出しても損はないぞ」と信用してもらえるようなものが。ピーター・ブルックもそこで紹介されたら「よし、観よう」と思われるような。考え方としてはクチコミで、実は昔ながらの（メディアの）あり方、使い方ですけど、でも演劇はそこしかないような気もするんです。

そもそも情報量が多いという問題もありますよね。だから“趣味分け”が必要かもしれません。棲み分けじゃなくて（笑）。ミュージカルが好きだったらこれ、こういうテーマに興味があるならこの海外ものがお勧めとか。

若い俳優、演出家、劇作家へのサポート

文化や芸術を巡る状況は厳しい。興味があっても、大量の情報から何を選ぶか、たくさん観たくてもチケット代は安くはないというハードルがある。そして興味がない人には、無料で楽しめるネットのゲームや漫画を一旦やめ、スマホから顔を上げてもらうところから始めなければならない。

―― 先ほど、「文化は漠然としたものではあるけれど」というお話がありましたが、そこには「文化は誰にとっても大事なものだ」という前提があると思います。でも今、その前提自体が共有されにくい社会になったと考えたほうがいいのかもかもしれません。そこで改めて野田さんに「なぜ文化は人間にとって大事なのか」をお聞きしたいのですが。

野田 僕がイギリスに留学していた時の話ですけど、ナショナルシアター（国立劇場）で芝居を観ようとチケットブースに行ったら、40歳近い私に「学生か？」と聞くんです。学生なら半額で観られるので。僕はロンドンの劇場やカンパニーで勉強をしていたけれど学校に通っていたわけではないので「うーん、まあ、学生」と答えたら、「証明できるものを見せろ」と。「それがないんだよね」と言うと、相手はなおも「何でもいいんだよ」と聞いてきて、結局何も持っていなかったのに半額してくれたんです。それって文化に対する余裕というか、愛情じゃないですか。どうやら外国から演劇を勉強しに来ているやつだと思ったら、ちょっと工夫してでも門を開くというのは。

こういうこともありました。トライシクルシアターというとても小さな劇場で、その時、『アンナ・カレーニナ』が大評判を取って当日券が大行列だった。僕も並んでいたんですが、「今日入れるのはここまで」と言われたずっと後ろだったんです。ところが係の人が僕にしかわからないように「ちょっと待て」と合図くれた。「何かな？」と思って待っていたら、たぶん、アジア系だから遠くから来たと思ったんでしょう。最後に入れてくれたんです。それが本当に素晴らしい舞台だったんですけど、こうしたやり取りも含めて、豊かな文化だと思うんです。

―― よく「それを体験する前よりも心が豊かになること」が文化だと言いますが、作品を観る前にその土壌が広がっているんですね。

野田 そういう体験をたくさんの人にしてほしい。せっかく演劇は、生きている人間がひとつの場所に集まって生まれるものですから。

―― 野田さんがなさろうと考えているのは、ご自身が受け取った文化への恩返しもあるのでしょうか。

野田 そうかもしれませんね。

―― つくり手の育成に関してお聞きします。まず俳優について。

野田 ざっくばらんに申し上げれば、テレビで名前の知られた人をキャスティングしてお客を呼び仕組みが演劇にはありますけど、それと離れたところで、いわゆる無名性の中で生きている役者さんとワークショップから作品をつくりたいと考えています。同時に、海外の演出家のワークショップをもっと頻繁に開く。そういうことがまとまっていくと、学校とまでは行かないけれど（俳優育成の）ひとつの流れはできますよね。

そのためには、やっぱり人と予算が必要ですが、一定のキャパシティ以上の劇場を使える俳優が減っているのは、芸劇に限らず大きな問題なので、何とかしたいとは考えています。

―― 演出家についてはいかがですか？ 大きな空間を使いこなせる演出家が少ないというのもずっと言われていることです。演出家向けのワークショップの計画は？

野田 演出家のワークショップって、確かにありますけど、僕はやり方がわからない。「勝手に育って来い」とも思うんですが。というか、役者中心の普通の

ワークショップに勝手に来て盗んで帰れ、かな。

―― 実際にプレイハウスで上演される作品を観るだけでも、かなり勉強になると思います。プレイハウスの作品はチケット代が高価なことが多いので、若い演出家たちは劇場に来る機会自体がなかなか持てない。当然、空間の使い方がわからない。

野田 野田地図のゲネプロで良ければ来てもらっていいですよ。学生たちを呼んだりすることもありますから。

―― 提案ですが、芸劇eyes参加者を中心に、プレイハウスで上演する野田さんの作品、海外の招聘もの、また別の誰かの演出作品と、年に3本でもゲネを見せてもらえば、それぞれの空間の使い方、照明や音響についてかなり具体的な勉強になり、プレイハウスを使える演出家の育成につながると思います。

野田 それはいいですね。芸劇の自主事業でならできますから、ぜひやりましょう。

―― 劇作家の育成についてはいかがですか？

野田 育成ではありませんけど、僕は毎年、岸田國士戯曲賞の選考委員をしていて、結構な時間をかけて候補作を読み込んで選考に臨むわけです。でも、選考委員会で何時間か喋って終わりなんですよ。審査後に書く講評も、字数は決められていて、本当はそれぞれの作品について言いたいこと、それを書いた人に伝えたいことはたくさんあるのに、何かそれはもったいないなという気が最近しているんですよ。

―― それはぜひ外に出していただきたいです。同じ選考委員の岡田利規さんは昨年まではツイッター、今年からは劇団のホームページでのブログという形で、審査対象の戯曲についての所感を公表されています。それは劇作家のみならず、観客にも戯曲や戯曲賞に興味を持ってもらう良い機会になっています。野田さんの講評を読みたい人はかなりいるはずですよ。

野田 ということは「やれ」ってことですね（笑）。さっき言った新しいメディアを、こうして愚痴ってばかりいないで自分で書いてつくっていけ、と。

―― 「やれ」とは申し上げますが（笑）、岸田戯曲賞の講評の公開は多くの劇作家へのサポートになりますから、ぜひご検討ください。

野田秀樹氏。写真：平岩孝享

大きな目標と、そのための具体的なプランの実践へ。すぐに成果が出ることではないが、これからの東京芸術劇場と演劇文化のために、小さくない変化が始まる。

取材・文：徳永京子 写真：平岩孝享

野田秀樹 HIDEKI NODA

劇作家・演出家・役者。東京芸術劇場芸術監督、多摩美術大学教授、東京キャラバン総監督。92年に「創団 夢の遊戯社」を解散後、ロンドンへ留学。帰国後の93年に演劇企画製作会社「NODA・MAP」を設立。以来「キル」「赤鬼」「ハンドラの鐘」「THE BEE」「ザ・キャラクター」「エッグ」「MIWA」「逆襲」「足跡姫-時代錯誤冬幽霊-」「One Green Bottle」など、時代に抗する話題作を発表。モーザルト歌劇「フィガロの結婚-庭師は見た!-」等、オペラの演出、海外の俳優やスタッフとの共同制作、2017年は9年ぶりとなる、『野田版 桜の森の奥開の下』で歌舞伎の脚本、演出を手がけ、大きな反響を得る。演劇界の旗手として枠を超えた精力的な創作活動を行う。2015年よりブラジル、東北、東京、京都など国内外の多様なアーティストとの文化混流による文化サーカス「東京キャラバン」を実施。類稀なる表現者達と新たな表現を創出し、幻想的なパフォーマンスを発表している。2017年、十八代目中村勘三郎とのタッグが話題となった伝説的作品『表に出るいっし』を、『THE BEE』の最強キャストとともに、新たな英語版『One Green Bottle』として創作。東京、韓国で好評を博し、いよいよヨーロッパツアーの皮切りとなるロンドン公演が4月にSOHO THEATREで幕を開ける。さらには、2018年9月～11月、NODA・MAP第22回公演の国内・海外上演を予定するなど、世界を駆け回り、意欲的に活動を展開。

『One Green Bottle』 作・演出・出演：野田秀樹 英語翻案：ウィル・シャープ
英国・ロンドン（ソーホー劇場 4月27日～5月19日）、
ルーマニア・シビウ（シビウ国際演劇祭2018 ラドゥスタンカ劇場 6月8、9日）巡回公演

NODA・MAP第22回公演 作・演出：野田秀樹
2018年9月上旬～11月下旬 東京公演の他、地方および海外公演を予定
www.nodamap.com/